



Numéro264 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 JUILLET—AOUT 2014 7—8月合併号

## ピアノ演奏+朗読+シャンソン、華の共演(生駒市・文化ホールで)

≪フランス・アラカルト≫ Renouve lée!

趣向を新たにした奈良日仏協会主催の「フランス・アラカルト」。今年度第3回(通算119回)イベントが、6月25日午後、生駒市コミュニティセンター文化ホールで開催されました。その名も『フランス音楽と詩の華々』、シャンソンと詩とピアノ名曲のコラボレーションです。出演者は、今井恵理さん(ピアノ)、杉本和子さん(詩の朗読)、そして梨里香さん(シャンソン)でした。

三野博司会長による開会のご挨拶では、ポール・ヴェルレーヌの「詩法」冒頭の「De la musique encore et toujours!楽の音を、 さらにいつまでも!」を引用しつつ、フランス詩における音調、韻律、諧調などの音楽性の重要さに触れ、さらにフランス歌曲は詩が

本来もつ音楽性を尊重して作曲されていること、そして詩と音楽がつねに精妙な調和を保っている、との 奥深いお話し。フランスの詩と音楽の関係を垣間見ることができました。続いて登壇された山下真生駒市 長は、ご自身のフランス文学との関係やフランス音楽愛好の自己紹介のあと、奈良日仏協会を極めて好 意的にご紹介いただき、さらには入会の勧誘までしてくださり、まことに有難いご挨拶でした。





いよいよ公演の始まりです。第1部は、今井恵理さんによる

ピアノ演奏。曲目は、ショパンの「ノクターン第1番・第2番」、ドビュッシーの「月の光」、「亜麻色の髪の乙女」、ラヴェルの「亡き王女のためのパヴァーヌ」、そしてプーランクの「愛の小径」となじみのあるものばかり。若い演奏家らしく歯切れの良い、かつ感性豊かな演奏に聴衆はうっとりとして聴き入りました。

次いで第2部は、杉本和子さんによるフランスの詩(日本語訳)の朗読。ヴェルレーヌの「それは恍惚」、「都に雨の降る如く」、「月の光」などに続いてボードレールの「夕暮れのハーモニー」、「旅への誘い」。これらはドビュッシー、フォーレ、デュパルクなどの作曲になる歌曲になっていますが、今回は歌曲として歌うのではなく、日本語訳で

朗読して、そこに今井さん演奏による歌曲のピアノ伴奏をつけるという、まったく独創的な試みでした。美しい言葉が脳裏に作り出す 情景に、ピアノ曲が彩りを加え、不思議なイメージの世界に聴き手をいざなってくれました。

そして第3部は、梨里香さんのシャンソン。これも今井さんのピアノ伴奏で、Sous le Ciel de Paris のイントロに乗って歌手登場。 語りを挟みながら La Mer, Le Parapluie, Une belle Histoire, Les Parapluies de Cherbourg, Si tu t'imagines..., そして Hanamizuki が歌われました。 最後の曲は、日本語をご自身でフランス語に訳した歌詞でも披露。 いつもながら(歌詞の深い理解 があればこそ)情感をこめて、気持ちよさそうに歌う梨里香さんでした。

最後の花束贈呈では、何と舞台に飾られた装花がそのまま三つのブーケに変身。客席から思わず笑い声がこぼれました。

残念ながら、紙面ではこれらピアノ演奏、語り、シャンソンの美しさ・素晴らしさを十分お伝え することはできません。参加した方々だけが味わえた至福のひと時でした。

なお、参加者は約140名。フランス・アラカルトとして異例の規模です。見事なパーフォーマンスをされた今井さん、杉本さん、梨里香さん(中辻純子理事)は勿論のこと、運営委員長の仲井秀昭理事はじめ、運営委員=実行スタッフの藤本美智子さん、向井佳代子さん、高島真貴子さん、古森和江さん、堤昇子さん達の献身的努力に支えられて本イベントを成功裏に終えることができました。



Félicitations! Merci beaucoup! そして、ご苦労様でした。

(濱惠介)

(追記: 些少ながら、収益金は生駒国際音楽祭実行委員会へ寄付されました。)

## 報告 《Le 14 juillet》 à Kyoto

2014 年、フランスの国祭日(こくさいじつ=日本名パリ祭) (Fête nationale) を祝うレセプションは、革命記念日当日 7月 14日(月)、在京都フランス総領事館(アンスティチュ・フランセ京都) において開催され、奈良日仏協会からは、三野(会長) および野島副会長が出席し、総領事および愛媛や福井の日仏協会代表者と懇談する機会を得ました。

2013 年秋に就任された Charles-Henri Brosseau 総領事が主催する最初の会であり、これまで夕刻、アペリティフ・タイムからのレセプションが、今年は正午からの開始となりました。 各界からの出席者 100 名を前にして、総領事は、冒頭あいさつにおいて、今こそ日仏の連携強化の気運が高まっているときであることを力説されました。続いて、今年からの新しい趣向として、日仏の少年少女たちによる両国歌の斉唱が行われ(写真右)、一層の友好ムードを盛り上げました。 (三野記)





# フランス文学の庭から〈34〉

名句の花束

Quand on voulut le détacher..., il tomba en poussière. (2) 引き離そうとすると白骨は粉々に砕けてしまった (ユゴー『ノートル・ダム・ド・パリ』 1932年)

ヴィクトル・ユゴーは1802年、軍人の子としてブザンソンに生れました。生家は残って いますが、ヴィクトルの生後すぐに一家はマルセイユへ転居したため、記念館になって いるわけではありません。向かいには映画の創始者リュミエール兄弟の生家もあります。 その後、ユゴーはパリで教育を受けて、早くから文学に情熱を燃やし、1827年に発表し た長大な詩劇『クロムウェル』とその序文がロマン主義の大いなるマニフェストとなり、30 年には戯曲『エルナニ』によってロマン派劇の勝利を確実なものにしました。

三野博司 会長・奈良女子大学教授



#### UNIVERSITE PERMANENTE

www.up.univ-nantes.fr

21 janvier 2014 Agnès SPIQUEL

« Notre-Dame de Paris : l'amour, la mort, l'Histoire (Paris 1482) »

小説に関しては、ユゴーは5作の長編を書いています。インターネットで、フランスのナント大 学公開講座を視聴することができますが、その中にユゴーの小説に関する連続講義があります。 語っているのはアニェス・スピケルさん(写真)。私の友人で、国際カミュ学会の会長ですが、カミ ュ研究に転ずる前はユゴーの専門家でした。2014年1月から2月にかけて行われた講義は、1 回 50 分で5回, 各回ごとにユゴーの長編小説を一つずつ取り上げています。 そのうち『ノートル

=ダム・ド・パリ』だけが刊行年代が早くて1832年、他の4作は『レ・ミゼラブル』を含めてすべて1860年以降の刊行です。

さて『ノートル=ダム・ド・パリ』は、新婚早々で金銭に困っていたユゴーに対して、出版社が金をもうけるなら歴史小説を書くように と勧めたことが執筆動機の一つでした。ただし、その機会をとらえて、ロマン主義文学運動のリーダーであった彼は、ノートル=ダム 大聖堂を舞台に15世紀のパリを舞台にロマン主義的歴史小説を書き上げることになります。

長大なユゴーの小説は本題を離れて脱線することが多いですが、この小説にも「これがあれを滅ぼすだろう」という謎めいた題が ついている章があります。2011年にはパリにおいてこの表題で学会が開かれたほどの有名な句ですが、私たちもここで少し脱線し て,この名句について語りましょう。

小説の主役はまさにノートル=ダム大聖堂であるといえます が、その大聖堂司教補佐のクロード=フロロが、テーブルに広 げてあった書物の方へ右手を伸ばし、左手を大聖堂の方へ差 し出して悲しげな目で言う場面があります。

「Hélas! Ceci tuera cela(ああ! これがあれを滅ぼす だろう) |

そのあと、フロロはこんなことばを言い添えます。「恐ろしいこ とじゃ! 小さなものが大きなものをうち負かすのだ。[……] **Le livre tuera l'édifice!** (書物は建築物を滅ぼすことにな るだろう!)」

これがどういう意味なのか、次の章において、作者みずから

が長々と説明を展開します。要点をまとめるとこうなります。古代から建築は人間の思想を記録するためのい ちばん重要で広く用いられた手段でしたが、グーテンベルクが活版印刷を発明して以降、その役割を書物に 譲りつつありました。人間の思想は、永遠に生きるために建築よりもさらにじょうぶで、持ちが良く、容易な手 段を発見したのです。これは歴史上の一大事件でした。「書物は建築物を滅ぼすだろう」という 15 世紀のフロ ロが作中において言ったことばを、19世紀の作者ユゴーが引き取って、いまや印刷術によって建築は死んで しまったと宣言します。そして21世紀の私たちは、デジタル革命がこんどは書物の生命を脅かす時代に生き ているわけであり、このフロロのことばに無関心でいるわけにはいかないでしょう。

また、脇道にそれましたが、以下は次号で。

### 東京日仏会館で『星の王子さま』シンポジウム

サン=テグジュペリ没後 70 周年を記念して、7月 19日(土)15 時から 20時 まで、日仏経済交流会(パリクラブ)の主催、平尾行降理事による企画・ 運営により東京日仏会館(渋谷区恵比寿)において、『星の王子さま』シ ンポジウムが開催されました。シャンソン、作品朗読、メッセージとスピ ーチ、写真やイラストの展示、そしてワインパーティと盛りだくさんの内 容でしたが、シンポジウムでは下表のように三野会長を始め 4 名のパネリ ストが『星の王子さま』について語りました。

- 1) 三野博司(「星の王子さま事典」大修館書店の著者、奈良女子大学教授)
- 2) 鳥取絹子(「サン=テグジュペリ 伝説の愛」岩波書店の翻訳者)
- 3) 田村セツコ (「プリンセス物語」ナツメ社の挿絵イラストレーター)
- 4) Muriel Jolivet (上智大学外国語学部フランス語学科教授)

(パネリスト順、敬称略)



パネリストの田村セツコ氏より三野会長にプレ ゼントされた「星の王子さま」のイラスト原画



## バスク紀行(最終回)

坂本 成彦 (顧問)

### <ラ・リューヌ登山>

サン・セバスティアンを出発して高速で15分ほど行くと、スペイン領からフランスに入る。料金所を過ぎると Hendaye という地名になっていた (左の写真は登山電車、窓ガラスがなくてカーテンのみ)。この日のメインは、La Ryunne 登山。この山は、ピレネー山脈の西方に位置し、42km の斜面をアブト式木製2両編成の

登山電車で時速8km、35分かけて標高905mまで登る。途中、馬やヤギの放牧など牧歌的風景に見とれる。素晴らしい天候に恵まれ、頂上からは、ピレネーの山並みが広がり、ビスケ湾、それに沿ったスペイン側、フランス側の街々を見渡せる雄大な眺め!麓の駅トイレに «komunaku»と掲示があり、なるほどバスク語でトイレのことかと納得する。

#### **<エスペレット>**(写真右、壁に干してあるのはトウガラシ)

山からおりて Espelette の町の Euzkadi (19世紀半ばに開業)というレストランで昼食。ファサードが赤と白の縦縞色のいかにもバスク風の大きなホテルの一階。やや暗いが広く、お客はかなり立て込んでいた。アントレは川鱒にネギ。メインは仔牛で付け合せがピーマン。テーブルにはお好みで振り掛けられるよう唐辛子の小瓶が置かれてある。うどん屋の七味みたい。なにしろここは唐辛子の町で、白壁の軒並みに赤黒い唐辛子の吊るし物のオンパレード。辛味はそれほど強くなく、甘味があって、肉、魚、野菜料理何でも振り掛ける。唐辛子の瓶詰めや唐辛子入りのチョコレートをお土産に買う。土産物屋は大賑わい。



#### <アイノア>

暫くバスで田舎道を行くと、『フランスで最も美しい村』の一つ Ainhoa 村へ立ち寄る。 赤と白の縦縞模様の民家が立ち並ぶ様が美しく可愛らしい。 スペインへの巡礼街道沿いにあり、巡礼を迎えることで発達してきた。 L'église Notre Dame de l'Assomption (14世紀) という教会を見学。 教会内部にバルコニーがあるのは、この地方独特の様式だとのこと。 村の人口増にも教会を増築しなくても済ませる工夫のようである。

### <サン・ジャン・ド・リュズ>

この日の宿泊地サン・ジャン・ド・リュズに着いたら雷雨襲来。まるで昼間の埋め合わせのよう。

ディナーでバスク料理を味合おうと、タクシーでお目当てのレストラン Zoko Moko へ。バスク語で「静かな場所」とのこと。まず、グリンピースのスープが出てきた。日本の茶椀のような容器に入っていてスプーンを使わず直接容器から飲むのだそうです。勿論ここにも唐辛子が入っていた。メインは「アンコウ」。最後に出たのは、コーヒー茶碗にチョコレートの半球が乗ったもの、(実は空洞のチョコレートの半球殻で)これに熱いエスプレッソを注ぐとチョコレートが溶け落ちて、サプライズ付きデザートだった。

翌日はサン・ジャン・ド・リュズの散策。ここは海沿いの小さな町で漁港でもある。夏はヨーロッパ各地から人々が集る観光地となり、 賑やかで人通りも多い。ここのサン・ジャン・ド・バティスト教会はルイ14世が1660年スペイン王女マリー・テレーズと結婚式を挙げた教会。 老舗ケーキ店のマカロンはこの結婚式の時に配られたものと同じレシピで作られているとか。 1884年に作られた屋内マルシェはバスクならではの食材がびっしり陳列!

#### <アリュデュード渓谷とバスク豚>

アルデュード渓谷は奈良県の山奥を走っているような、切り立った渓谷の山道。そこの地でバスク豚の放牧と生ハムの生産で知られているピエール・オテイザ本社工場を見学。バスク豚の絶滅危機を救ったオテイザ氏から丁寧な説明を受け、生ハムの製造工程と貯蔵を見学。そのあと放牧場へ向かい、野山に放たれドングリやブナの実を食べて育つ自然放牧の様子を見学。生ハムの味の秘密はこれかと想った。隣の売店でワインを飲みながらハムなどを試食。残念ながら現地で買っても日本へは持って帰れない。昼食はニーヴ川沿いの『バスクの美しい町』サン・テティエンヌ・ド・バイゴリで鱈の料理。各戸の生垣や庭にバラが咲きみだれ、窓辺には花が咲いていてとても美しい村。

#### <バイヨンヌ>

バスク文化の中心都市ともいえ、古代ローマ時代には街道筋の町として栄えた。司馬遼太郎の「街道を行く」にも出てくる。今もスペインのサンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼路でもあり、ニーヴ川を挟んで、商業地区のグランバイヨンヌと美術館や観光名所の集るプチ・バイヨンヌの二つの地区から成り立っている。川沿いのバスク博物館ではバスクの歴史と伝統に触れることができる。港町としても栄え、カカオの輸入地であったためチョコレートで有名。何軒か有名店があり、1854年の創業当時と同じ製法で作り続けている店では、名物のショコラムース(泡立てたココア)を味わう客で超満員。翌日は、雨も上がり、SNCFのバイヨンヌ駅から TGV でパリ・モンパルナス駅へ向かった。

## 第34回 奈良日仏協会シネクラブ例会(6/29)報告

6月29日(日)の例会は、「フレンチ・ミュージカル」特集の第2回目として、クリストフ・オノレ監督の『愛のあしあと』(2011)を取り上げました。当日はシャンソン愛好家の方たちや、尼崎から駆けつけてくださった方など、毎回のテーマとプログラムごとに異なる顔ぶれの参加者があるのも、当シネクラブ例会の楽しみの一つとなっています。

前回の『シェルブールの雨傘』の場合、台詞自体にメロディーがつけられて唄われ、台詞と独立した曲は一つもありませんでした。そのため、厳密にいえば「ミュージカル」ではないとする見方もあります。それに対して今回の『愛のあしあと』は、台詞やナレーションだけでは十分に説明されていない登場人物のおかれた状況や心情が、台詞とは独立した歌によって表現されていて、典型的なミュージカル作品といえるでしょう。とはいえ、もともと小説家としてデビューした監督クリストフ・オノレの演出には、独自の工夫と個性が感じられます。

『愛のあしあと』には、台詞と音楽、言葉とメロディーとの間にある、ゆるやかな繋がり又は乖離を、個々の観客が各自

の想像力によって補いながら、物語を紡いでいかなければならない側面があります。 前半は、フレンチ・ポップスの軽快なメロディーとともに、恋のはじまりの不安・期 待・喜びが表現され、見ている側もそのドキドキ感をいっしょに味わえ、感情移入も 容易です。それに対して後半は、異性愛者と同性愛者との困難な恋愛、HIV 感染症 の問題、真実の「愛」とはどういうことなのか、人生の「幸福」とは何かといった問 いかけが物語に織り込まれ、ストーリー自体が複雑で分かりづらくなります。もしも 後半部を通常の映画のように台詞だけで展開させたとするなら、相当に深刻な作品に なったことでしょう。



「音楽」がいかに大切か。それは、この映画に対するオノレ監督自身の言葉から伺うことができます。「私はミュージカル・コメディの精神を愛しています。そこには泣き言も不満も存在しません。叙情的な一瞬によって悲惨に満ちた日々が贖われる、そのような希望に溢れているのです」「ミュージカルで、人々の感情のあやを表現してみたいと思いました。それ



は 50 年以上に及ぶ時を刻む物語です。叙情的な味付けがされていますが、登場人物たちは決して懐かしさを語りません。毎日を悔いなく生きていくだけです。歌で自分たちを発見したり、豊かな感情を歌で表現したり、限界のない自由を自分たちの手でつかもうとしています」。

例会では、自分を愛し理解してくれる男性の愛を退けて、同性愛者の男性との困難な愛に生きようとするヴェラの生き方について、フランス人女性と日本人女性の恋愛観の違いを、『源氏物語』などの古典文学に見られる受け身の女性の態度を例に挙げて指摘するコメントがあり、とても興味深く思われました。 (浅井直子)

### <クリストフ・オノレ監督の『愛のあしあと』に、人生の真実を探る>

6月のシネクラブ例会で『愛のあしあと』を観た。フランス公開 2011 年の比較的新しい作品である。街角に金髪の少女…といえそうな若い女が佇んでいる。男が近寄り二人は無言で歩き出す。「ホテル?」と男が言う。「家で」と女が言う。ビジネスは成立したのだ。少し歩いたところのアパートの一室が彼女の仕事場だ。しかし娼婦マドレーヌを、客であるチェコの医師ヤロミルは愛してしまう。二人は結婚、娘ヴェラが生まれる。後半は、成長した娘ヴェラの物語。彼女は恋人と旅行中、アメリカ出身のドラマーに魅かれるが、彼は自分がゲイである事を告白する。それでもマドレーヌは彼への愛に生きようとする。最終的にヴェラが自ら命を絶ったのは、彼がゲイであった故ではなく、自分自身が歩いてきた人生に対する底知れない悲しみであり、寂しさだったのかもしれない。セックスのシーンはどれも美しかった。暗闇も薄く漏れる光も女の脚も…。オノレ監督は、人生の真実を異性愛・同性愛に関わらず、性愛を通して表現しようと試みたのではないだろうか? 作品全体に優しい音楽が流れていた。ミュージカルでありながら、重いテーマを孕んだ作品だと思う。娼婦マドレーヌをカトリーヌ・ドヌーヴ、その娘ヴェラをキアラ・マストロヤンニと実の母娘で演じている。 (工藤順子)

《 **奈良日仏協会シネクラブからのお知らせ** 》 2014 年秋は、フランソワ・トリュフォー特集を企画中です。 今のところ第一回目は、10月 26日(日)に『隣の女』を予定しています。もう一本をどの作品にするかはまだ 決まっていません。というのも、どれを選んだらいいのか迷うほどに味わい深い作品が多いからです。もし会員の みなさまからトリュフォー作品ならぜひこれを! という希望がありましたらお寄せください。『隣の女』は、次号モンナラで あらためて案内致します。ご期待ください! 問い合わせ: 浅井直子 Nasai206@gmail.com tel. 0743-74-0371



## フランスの"あるある!"

お客様とフランスに関する話になると、やはり料理の話。続いて観光 名所や土地の話。その次に、日本にはないフランスならではの"あるある!"の話になります。この Mon Nara の読者の方々も、"そうそう!" って感じる事があるのではないでしょうか。

例えば…、きっちりぴったりに慣れてしまっている我々日本人には考えられないくらい、アバウトな時間の感覚。お店が閉店時間よりも早く閉まったり、交通機関の時刻表もあってないようなもの。看板がすごく小さくて、初めていくお店は見つけにくい。少々の雨なら傘をささない。公衆トイレは有料が多い。カフェでは座る場所によってコーヒーの値段が違ったりする。テラス席がフランス人にとって特等席。夕食の時間が



テイクアウト用オードブル

遅い(だいたい 20:00 時以降)。パン屋さんでバゲットを買うと «Voilà!» とそのまま手渡しされる。マクドナルドではビールも飲めたりする。いつでもどこでも «Bonjour!»、散策していると一時間に一回は聞く «Putain! Merde.»、くしゃみをすると «A tes souhaits.» «A vos souhaits.» と言われる、などなどです。どれも日本には馴染みの無いことばかり。しかし、なにげない言葉や習慣にこそ、その国の文化を感じます。この夏休みには旅行される人も多いのでは? ぜひフランスの"あるある!"を見つけてくださいね。上記以外の"あるある!"を見つけられた方は僕までお知らせください。

それでは皆様 Bonnes Vacances!

(法人会員・北田浩久)

(お知らせ) 8月24日(日)に奈良町のお寺の元興寺さんにて、【夢祭り】が開催されます。屋台イベントにビストロルノールが出店致します。屋台には奈良の名店が10店舗程出店されます。他にも楽しいイベントがございますので、会員のみなさまも是非遊びにいらしてください。屋台の時間は、11:00~16:00です。

## 第 121 回 《フランス・アラカルトのご案内》

- ❖ 日時:2014 年 9 月 26 日(金)15 時~17 時
- ❖会場:「ビストロルノール」TEL&FAX: 0743-75-9555

(生駒市松美台 33-2 ランドヒルパート IV 会場への行き方が分からない方は、 近鉄生駒駅中央改札口に 14 時 30 分に集合して下さい。)

- ❖会費:1500円 (グラスワイン一杯 + 数種類のチーズ)
- ❖問い合わせと申し込み先: Nasai206@gmail.com (随時受付)

Tel & Fax:0743-74-0371 (9月1日から受付)



◆今回のアラカルトは、今年から奈良日仏協会の法人会員になってくださったビストロルノールにて、会員(家族)同士の 懇親会を兼ねての「チーズ試食会」です。シェフの北田さんにはクレールモンフェランのレストランでの修行時代、チーズソ ムリエの奥様にはその日に賞味するチーズ、さらに三野会長にはクレールモンフェランの留学時代について、それぞれお 話をしていただきながら、参加者同士のざっくばらんなおしゃべりの会にしたいと思います。

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

#### ❖ チーズソムリエの北田由佳さんからのメッセージ

夫からの影響でワインというお酒のおいしさを知ってしまった私は、必然的にベストパートナーであるチーズに心奪われていきました。最初は手探りで「片端から食べてみる」を繰り返し、そのうち自分の好みがわかってきて、気がつけばチーズのとても奥深く楽しい世界へ入り込んでいました。学んでいくと、チーズにはちょっとしたエピソードがあり、そこには歴史や文化が絡んだりしているのが、面白いのです。チーズの背景を知れば、より一層チーズを美味しくいただけます。想像の翼を広げながら、一緒に試食しませんか? ご参加お待ちしております!



クレルモン・フェラン(Clermont-Ferrand):オーヴェルニュ地域圏の首都、 人口約15万。ガリア時代からの古都で、周囲には休火山もいくつかある景 勝の地。第一回十字軍の遠征が議決されたのもここの教会(1095年)。ミシュ ラン社の本部があり、またB.パスカルの生誕地でもある。 (編集部注)

#### 第 120 回 「フランス・アラカルト」(7/22) 報告

Mon Nara

7月22日(火)野菜ダイニング「菜宴」で開催されたアラカルトは、 奈良町在住のピエール・レニエさんと奥様の佳栄子さんのお二人をゲス トにお迎えし、たくさんの写真を見せてもらいながら(プロジェクターで菜宴の 壁に映写)、様々なお話をお聞きしました。とても興味深い内容で、参加者の みなさんも熱心に耳を傾け、レニエさんに質問し、日仏交流の素晴らしい機会 となりました。



### 【リールの町について】

1792 年の攻囲戦 (Siège de Lille) の勝利を記念する町の中心広場に

立つ女神像、50年前には荒れ果てていたが現代では再生されて最もシックな地区となったタマネギ広場(Place aux oignons, 写真右上)、フランス第二の規模を誇るリール美術館 (Palais des Beaux-Arts)、毎年9月に開催されてい る大規模な骨董市 Braderie 、骨董市の時期はメニューが moules-frites (ムール貝のポテトフライ添え) だけになる カフェレストラン Aux Moules、リールの郷土料理 carbonade flamande などの紹介。

#### 【リールの日仏協会 Association Japon & Culture à Lille について】

2000年にレニエさん夫妻と友人ひとりの3人を発起人として、約50人の日本語講座の受講生からスタート。はじめは事務局 も日本語講座の講師も、すべてボランティアだったが、年々規模が拡大。4~5 年後に、事務局員や講座講師を雇用して、給料 を支払って運営する形態となる。会員が増えるにつれ活動が多様化。日本語講座の他に、書道講座、折り紙講座、漢字検定、 日本人を親にもつ子供たちに母親と一緒に日本語に触れてもらう会の開催。現地の小・中・高の学校への日本語の出張授業、 日本語や日本文化を紹介する様々な展覧会やサロンへの出展、三味線や琴のコンサートの開催、日本人音楽家が催すコン サートの広報支援、日本語のロゴを入れたTシャツや腕時計の販売、200 人以上が集まる大規模なパーティを毎年 2 回開催、 日本への観光旅行、会報発行、HP 開設、等々(写真下)。2011 年には 250 名の会員がいたが、レニエさん夫妻が日本に移 住しリールを去った現在は会員数が半減。それでも活動は今も続いている。



#### 【リール日仏協会と奈良日仏協会の違い】

リールの会員の年齢層は  $16\sim30$  歳までの若い世代が中心で、全体の 60%以上を占める。 会員の 80%は manga (漫 画) への関心、15%は柔道・座禅・折り紙他の伝統文化への関心、残り 5%が日本の文学・映画・旅行など文化一般 への関心。一方、奈良日仏協会は女性が中心で、文学・映画・旅行のフランス文化一般への関心が高い。manga も文 化のひとつではあるが、互いの会員の関心のある分野が異なっている。今後、リールと奈良の日仏協会の間で交流す る機会が持てればいいとは思うが、年齢や関心のギャップがあるのでむずかしい側面もある。

#### 【フランス詩と日本の俳句の朗読】

レニエさんが好きな詩として選んだボードレールの Correspondances 「万物照応」を朗読。日本の仏教を専門研 究しているレニエさんは、修験道の人達と大峰山に登った時、人間と自然の間に照応が感じられ、この詩が思い浮か んだとのこと。詩の中の言葉「象徴の森」をキーワードにして、会員で俳人でもある泉悦子(俳号・堀本吟)さんに 選んでもらった俳句数種を、参加者がその場で一首ずつ朗詠。花谷清の「真夏日の森は聖堂鳥睡り」の句が、ボード レールの詩とよく響き合っているように感じられた。



#### 【参加者の自己紹介と会長の言葉】

テーブルを囲んでの全員の自己紹介に続いて、個性あふれる参加者のみなさ んのお話(ここに紹介できないのが残念ですが…)を聞いた三野博司会長の締 め括りの言葉。「リール日仏協会の話を聞き、年齢のギャップにびっくりしま したが、たったいま一人一人の会員の方の自己紹介を聞いて思いました。大丈 夫! 向こう(リール)の若さに負けていない、十分同じレベルで交流できる!」。 最後に、当日定休日だったにも関わらずお店を開けてくださり、アラカルトに も会員として参加された「菜宴」の久保田さんが、お店の前で記念撮影をして くださいました。 (浅井直子)



## 新入会員の紹介



はじめまして。7月に入会させていただきました。私がフランスに興味を持ったきっかけは高校生の頃、 とあるフランス映画を観た時に「何て綺麗な言葉なんだろう!」と、衝撃を受けたことでした。その時から 「意味は全く分からないけど綺麗な言葉」を、何とかして話せるようになりたいと、大学でフランス語とフ ランス文学を専攻しました。まだ簡単な挨拶もままならない状態で、思い立ったら即実行の私は、夏休みを

利用して初めてフランスに行きました。最初はホームステイで 2 週間、そこからますますフランスの魅力に取りつかれ、今度は 1 ヵ月、6 ヵ月 …と、どんどん期間が延びていき、気が付けば私のパスポートはフランスのスタンプで埋め尽くされていました。

一番長く居た北フランスでは、ダニー・ブーンの映画 Bienvenue chez les Ch'tis (下欄参照) に出てくるような方言があり、憧れの綺麗なフランス語というよりは「たどたどしい訛り」を覚えて帰国しました。それ以来もう長い年月が経ちましたが、こちらに入会したことをきっかけに、またフランスについて楽しく勉強できたらと思います。よろしくお願いいたします。 (野澤晴香)



リールの町の中心にある広場に立つ 女神像(1792年の攻囲戦の記念), 本人撮影

Bienvenue chez les Ch'tis (2008年, 106分, 日本未公開のフランス映画)

- ★ダニー・ブーン監督・主演。2008年にフランスで公開され大ヒット、フランス国内では『タイタニック』の2075万人に次ぐ2048万人の観客動員数を記録。フランスの北部と南部の文化の違いやステレオタイプ的な偏見を笑いにしたコメディ。
- ★南仏の郵便局員フィリップは人事異動で北フランスの Ch'tis 地方 (ビールの産地としても知られる) に左遷され、はじめはこの地方独特の訛りや生活習慣を嫌っていたが、土地の人たちとの生活になじむにつれて楽しくなってくる。 Ch'tis の訛りやそこから起こる騒動が笑いを誘う。
- ★ダニー・ブーン演じるフィリップの言葉には、北フランス地方の特性がよく示されている。
- « Un étranger qui vient vivre dans le Nord pleure deux fois. Quand il arrive et quand il repart... » 「北にやって来るよそ者は 2 度泣く。初めて来た時とここを去る時に…」



(編集部注)

★ダニー・ブーンは大好きで、映画の他にもコメディ舞台の DVD をたくさん持っています。何度観ても、お腹が筋肉痛になるくらい面白いです。Bienvenue chez les Ch'tis は、日本語に翻訳するのは難しいかもしれません。直訳はできても、あの独特のニュアンスは伝わりづらいのではと感じました。特に観光スポットもなく、何もない地域なのですが、映画の内容の通り、人は温かく、料理はおいしく、まさにダニー・ブーンが言っていた通り「北に来た人間は2度泣く。初めて来た時(何もなく悲しくて)、そして去る時(もっと居たくて)」という街でした。



このたび奈良日仏協会に入会させていただきました。現在、大学の非常勤講師として、外国人留学生に日本語を教える仕事をしています。私が初めて生のフランス語にふれたのは、新婚旅行先のタヒチでした。当時はフランス語の知識は皆無で、現地ではやむなく英会話で通すという状態でした。その時から、いつかフランス語圏に旅するときは "Bonjour!" と、気楽に言えるようになりたいと思い続けていました。

思い返せばフランス語学習の最初の一歩は、20代後半、長期入院中に NHK ラジオ講座を聞くことからで

した。その頃は体調も環境も絶不調で、フランス語講座をただ聞き流すだけの日々。いつかほんとうにフランスに行ける日が来るなんて思いもよりませんでした。でも時は流れ、おかげさまで病気は寛解。夢は叶い、今では憧れのパリへ一人旅もできるようになりました。それにつけても、訪れる度にパリはフランス語しか似合わない街、という感を強くしています。ずっとフランス語初心者のままですが、これからもフランス語とかかわっていけたらと願っています。どうぞ皆さまのご指導をよろしくお願いいたします。



## 「菜宴」よりおしらせ:《ケータリング・パーティー承ります》

ご自宅・教会・バーベキュー会場・ホール・様々な会場に出向き、ご予算に応じ素敵なお料理をご用意いたします。今までの当店でのケータリングと言えば結婚式が主でしたが、近年は故人を偲ぶお別れ会などのオーダーが増えてまいりました。コーススタイル・ブッフェ形式・大皿形式、ご希望をお伝えいただければ打合せの上お見積りいたします。お店では地元野菜をたっぷり使ったメニューを取り揃えております。会員のみなさまのお越しをお待ちしております。



場所: 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2階 tel. 0742-26-0835 (小西さくら通り商店街 文具店南側の階段上る) 営業時間: (昼)  $11:00 \sim 14:30$  (ラストオーダー) (夜)  $17:00 \sim 21:30$  (食事のラストオーダー) (法人会員・久保田耕基)

## **≪2014 年度第 3 回 理事会報告≫**

-----事務局

日時:7月17日(木) 場所:菜宴(奈良市小西町)

出席者:三野、ジャメ、野島、濱、浅井、井田、仲井、中浦、樋口、藤村 議題1.前回理事会以降の活動を振り返る

- フランス・アラカルト: 5月22日第118回(既報)、
  6月25日第119回「フランス音楽と詩の華々」@生駒コミュニティセンター・文化ホール(巻頭記事で報告)
- 2) シネクラブ例会:6月29日 @奈良市西部公民館、「愛のあしあと」 (本号記事で報告)
- 3) 会員名簿発行:6月8日 発行頻度の見直しと追補版の検討
- 4) 在京都フランス総領事招待、Fête Nationale Française (パリ祭) : 会長ほか出席。

議題2. 当面の行事・活動計画

1) フランス・アラカルト:

7月22日 ゲストはピエール・レニエさん (予告既報・本号記事で報告) 9月26日ビストロ・ルノールで、チーズのお話と試食。計画を承認。

- 2) 秋の教養講座: 11月実施を想定しテーマや講師について意見交換。
- 3) フランス語ガイドクラブ:立ち上げの条件はリーダー、結論出ず。

議題3. Mon Nara

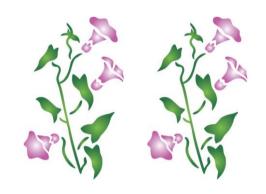
- 1) 20 周年記念特別号:完成原稿の確認、印刷製本部数・費用・発注先等の 承認
- 2) 次号の予定: アラカルト 119 回 (6/25) の報告をトップに。

議題4. その他 サーバー使用料の支払い、入会手続き方法の確認、次回理 事会日程など。

## 会員通信⋉⋉⋉⋉

2014年5月~7月の新(再)入会員: 山本邦彦さん、西久保美芳さん、野澤晴香さん、米津春日さん、石川康恵さん、高橋幸博さん、中澤和子さん、栗本遥香さん。新しい(懐かしい)仲間が加わって喜ばしいかぎりです。これから奈良日仏協会の活動の幅が広がって、会員同士の交流の機会が増えるといいですね。

※会員の皆様の短信をお寄せ下さい。



## 編集後記 《日仏文化協力90周年に思う》

フランスの「国是」とも言える文化外交は久しく以前からのものですが、特に注目すべきは大使などの人事でも「文人」「芸術家」などを起用し成果が得られてきたことです。今から90年前の 1924 年、詩人・作家であるポール・クローデルが駐日大使の時、実業家の渋沢栄一の尽力を得て東京に「日仏会館」が設立されたのが両国の文化交流の発端です。芸術ジャンルの文化交流に「食」芸術を加えることも早くから行われていたため、今日、パリで「箸を使って」寿司は勿論、ラーメン、ソース焼きそばを食べる風景も数多く見受けられます。もう二十数年以前に関西から発信されたものにポール・ボキューズの提唱した「新」フランス料理(nouvelle cuisine française)があります。これは筆者の知る限りでは、新鮮な魚肉などをそのままフランス風に仕立て上げたものと理解していました。日本料理は「料理」で、フランス料理は「料理」だと――これは著名な評論家の言ですが(下線のある方に重点があるという意味)、ボキューズの主張は「材料」にも「調理」にもこだわったということです。日仏の文化協調がグローバルな潮流を変えることも可能であることの一例でしょうか。

- ◆当協会では会員を募集しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を 極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。会員通信欄もご活用ください。

締切日:次号は9月30日が原稿締切日です。

Mon Nara juillet—août 2014 7-8 月合併号 numéro264 奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP: http://www.afjn.jp E-mail: afjn\_info@kcn.jp FAX 0742-62-1741

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第30号[郵便物のみ] ②発行責任者:三野博司